

(加世田市大字村原字柵ノ原)

位置と環境

本遺跡は、加世田市北部の万之瀬川と加世田川の合流地点西側にある標高約30mの独立台地上に立地し、周辺部との比高差は約20mを測る。現在は、国指定史跡を中心に遺跡の一部は保存されている。

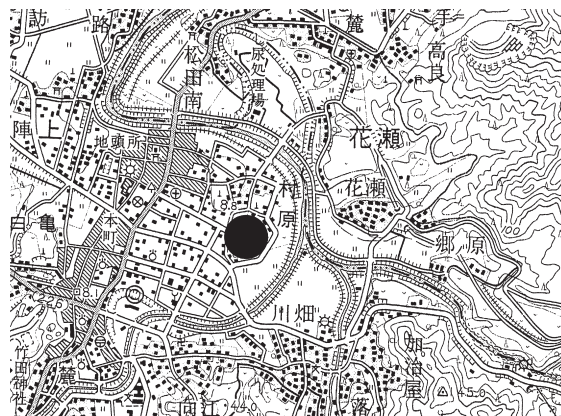
調査の経緯

私立学校の建設に伴って、加世田市教育委員会は県教育委員会の協力を得て昭和50年（1975年）に確認調査を、昭和52年（1977年）には台地南端部約2,000㎡を対象に本調査を実施した。

その後、加世田都市計画事業・第四次土地区画整理事業に伴って加世田市教育委員会は昭和61年（1986年）の確認調査を経て、平成元年（1989年）から平成5年（1993年）にかけて台地全域約21,600㎡を対象に本調査を実施した。

遺構と遺物

本遺跡は、後期旧石器時代、縄文時代、弥生時代、

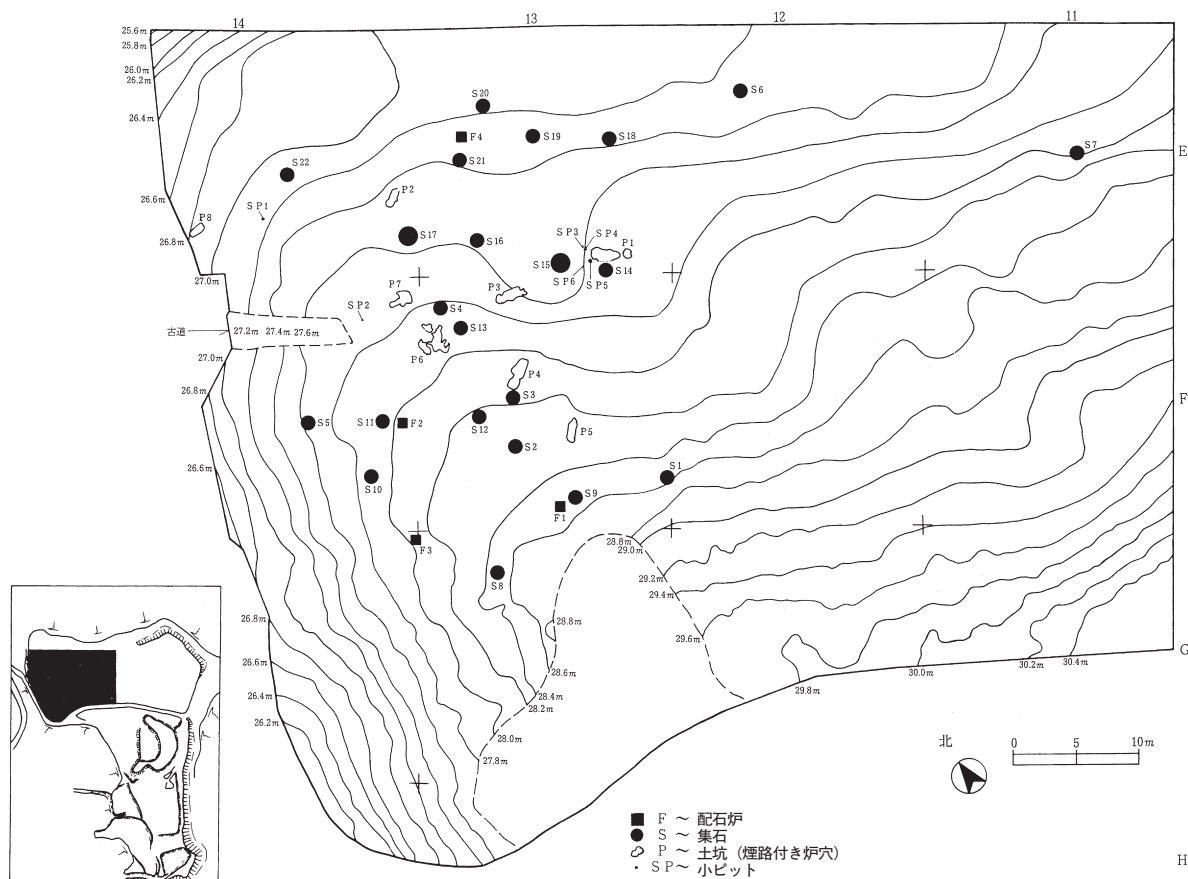


第1図 柵ノ原遺跡の位置

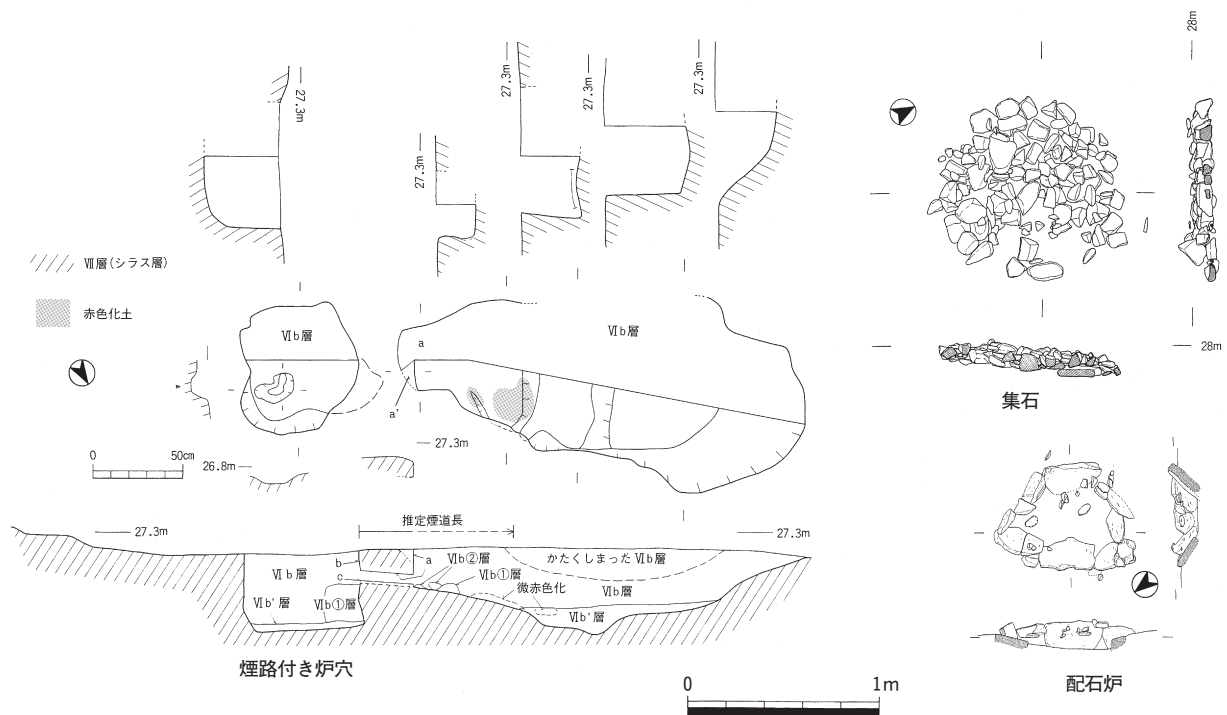
古墳時代、古代、中世、近世にわたる複合遺跡である。特に、縄文時代草創期の調査が注目された。

〔縄文時代草創期〕（第2・3・4・5図）

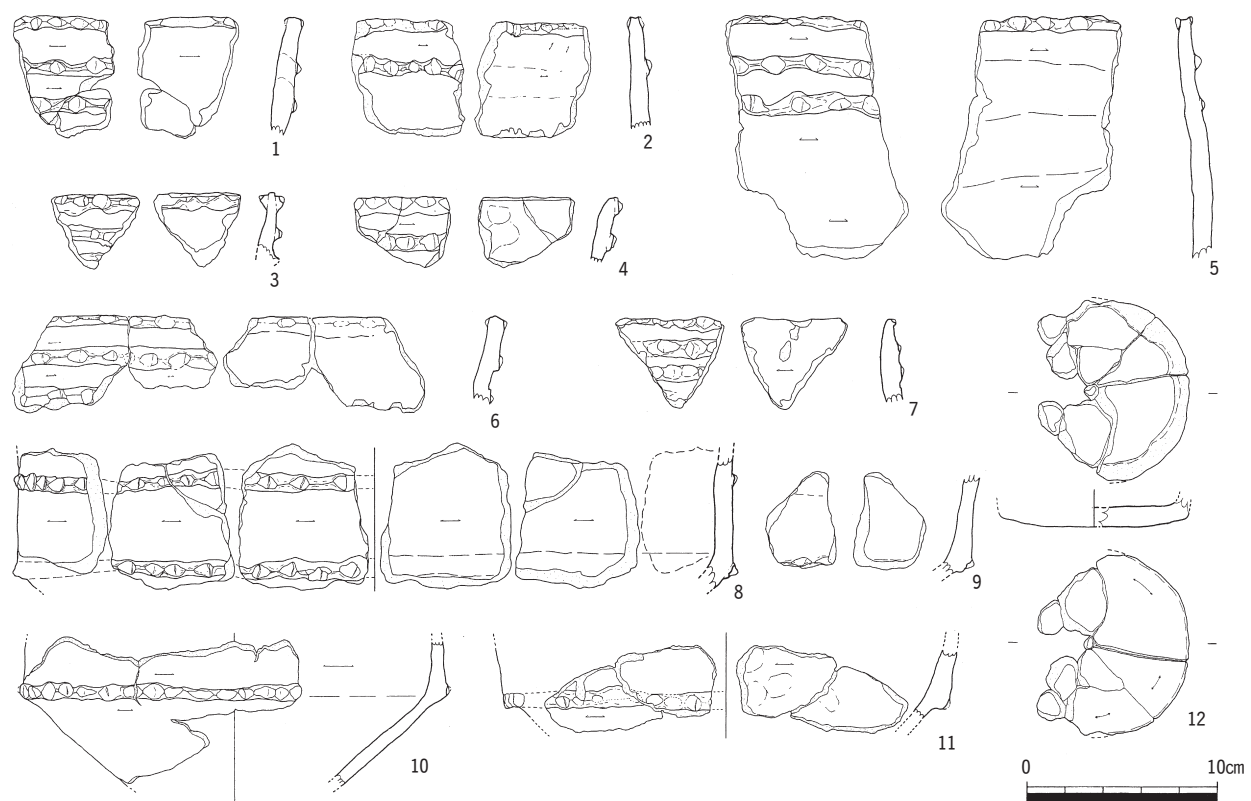
調査区北側の約5,000㎡から隆帯文土器（第4図）がまとまって出土し、その量はごく小さな破片も含めて2,041点と全国の縄文時代草創期遺跡に比べて極めて多い。石器は、石鏃（第5図13～18）、磨製石斧（第5図19～25）、打製石斧、磨敲凹石（第5図26～29）、石皿（第5図30～31）、砥石、ハンマー



第2図 縄文時代草創期の遺構配置図



第3図 縄文時代草創期の遺構



第4図 縄文時代草創期の土器

ストーン、パンチ、礫器、背部二次加工素刃石器、ピエスエスキーエ、スクレイパー類、石核、軽石製品といった縄文時代の遺跡で出土する一般的な石器

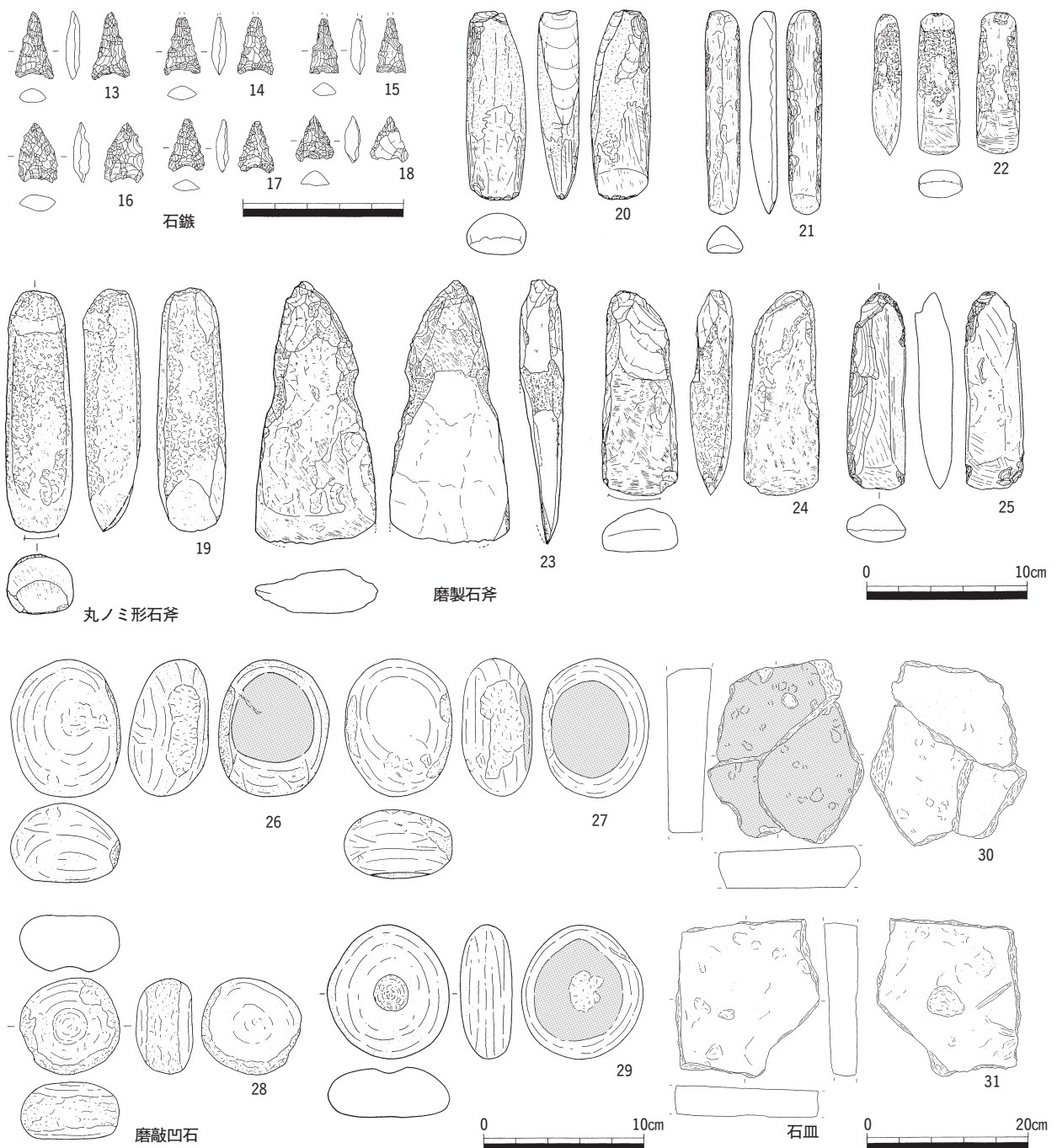
が出揃い、また、煙道付き炉穴8基（うち7基は未発掘）、配石炉4基、集石22基等といった多彩な遺構群（第2・3図）も数多く発見された。

[その他の主な時代]

後期旧石器時代では、上層から細石刃核、細石刃といった細石刃文化期の遺物が出土し、下層から剥片尖頭器、三稜尖頭器、スクレイパー類等といったナイフ形石器文化期の遺物がそれぞれ出土した。

縄文時代は前述の草創期のほかにも早期から晩期にかけて連綿と出土している。特に早期の遺物が最も多く、前平式土器・吉田式土器等といった貝殻文

系円筒土器群を主体に住居跡の可能性のある竪穴状遺構そして集石・土坑といった遺構も出土した。前期から晩期については、同じ遺物包含層から曾畑式土器・深浦式土器（前期）、並木式土器（中期）、指宿式土器・市来式土器（後期）、上加世田式土器・入佐式土器・黒川式土器・刻目突帯文土器（晩期）等が混在して出土している。石器では特筆すべきものとして金環形の玦状耳飾が出土した。



第5図 縄文時代草創期の石器

古墳時代は昭和52年（1977年）の調査で6軒の竪穴式住居跡等の遺構に伴って成川式土器、須恵器、土錘、敲石、砥石、軽石製品、刀子等が出土した。

中世には当地に尾守ヶ城（山城）が存在することが近世の古記録によって示されていた。発掘調査の結果、平坦地（曲輪）とそれを囲う空堀・土塁が構築され、掘立柱建物跡等の柱穴群も多数検出した。遺物は15～16世紀を主体に貿易陶磁器、国産陶器（備前焼・瀬戸焼等）、瓦質土器、土師器、古銭、鉄器等が出土した。

特徴

本遺跡は国内でも数少ない縄文時代草創期中葉の集落形態を良好に示す遺跡である。本遺跡で残された南九州における縄文時代草創期中葉は、それ以前の草創期前葉に比べて遺構の数量が著しく増加し、また、煙道付き炉穴にみられるような複雑で高度な遺構が出現してくる。遺物においても、土器量が大きく増加し、器種の分化・土器の大型化が進んでいる。また、堅果類の加工に使われる磨石・敲石類と石皿や木材の活発な利用を示す磨製石斧も増加・発達し、そのほか様々な器種の石器が出揃ってくる。こうした状況は遊動から定住への移行を示していることから雨宮瑞生は、当該期を初期定住と位置付けた。さらに越冬定住と越夏定住の組み合わせからなる振り子式の定住をモデルとする社会を想定し、同時期の鹿児島市掃除山遺跡との対比から柗ノ原遺跡を夏の拠点集落と位置付けた。

〔丸ノミ形石斧について〕（第5図19）

柗ノ原型石斧とも呼称される丸ノミ形石斧は縄文時代草創期から早期にかけて見られる特徴的な石器で、南九州をはじめ北琉球地域、伊豆・小笠原諸島に広く分布する。その刃部の形態から丸木舟の製作工具として位置付けた小田静夫は、その原郷を東南アジアや、南中国を含めた黒潮圏に求めている。これに対し、新田栄治は、小田によって柗ノ原型石斧とされた東南アジアの磨製石斧の時期が新しいことにより、東南アジアからの伝播と考えることができない点等を指摘している。

〔煙道付き炉穴について〕（第3図）

煙道付き炉穴は、一般的には縄文時代早期に九州

と関東を中心に出土しているが、縄文時代草創期の検出例としては本遺跡のほかに鹿児島市掃除山遺跡・加世田市志風頭遺跡の2遺跡のみでいずれも国内最古例になる。

遺構の性格については、厨房施設・竈・燻製施設等の見解が出されているが、本遺跡例にみられる細長い煙道（高さ8cm、長さ推定85cm）では構造的に直接炎が届かないことから炉や竈といった利用は考えにくく、煙の利用を目的とした燻製施設とするのが妥当と考えられる。また、土坑内に残存していた脂肪酸を分析した結果、長楕円形の土坑内からは火を焚く際の燃料となる植物性の脂肪酸が検出され、薫煙部と考えられる円形の土坑内からはイノシシに類似する動物性の脂肪酸が検出されたことから、燻製施設説を裏付けるデータを示すことになった。

資料の所在

本遺跡は平成9年（1997年）3月11日に国の史跡に指定されたことから、縄文時代草創期の遺構・遺物が多量に出土した3,279.33㎡を遺跡保存範囲とし、出土した遺構の大半を埋め戻している（煙道付き炉穴8基、配石炉4基、集石15基、小ピット6基）。また、出土した遺物は、加世田市教育委員会に保管している。

参考文献

- 加世田市教育委員会1977「村原（柗ノ原）遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』1
- 加世田市教育委員会1977「村原（柗ノ原）遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』5
- 加世田市教育委員会1998「柗ノ原遺跡（旧石器・縄文時代草創期）」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』15
- 加世田市教育委員会1999「柗ノ原遺跡（縄文時代早期）」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』17
- 加世田市教育委員会2000「柗ノ原遺跡（縄文時代前期～晩期）」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』20

（上東克彦）